

現代へのメッセージ

般若心経

Ver. X

空不動

2015/11/09 更新

はじめに

世の中には 仏教風に解釈した般若心経は沢山見当たりますが どれもこれも語句の解釈には成っていても 全体像があやふやで 内容が矛盾に満ちており 読者を心底納得させるものは皆無と言えます。

私からは 執筆者自身が 納得しないまま語句だけを解釈し 関連事項を並べて書いているだけ と思えてしまいます。

それ故に 読者としては腑に落ちないまま 「何か違う」との疑問を持ちつつも 納得できずに悶々としているというのが 偽らざる気持ちと言っても決して過言ではないでしょう。

それであっても 般若心経は二千年間 「意味不明」のまま 誰にも解説されることなく 歴史の中に生き続けてきたのです。

ここに著者が自らの修行体験を通して、これを読み解いてみれば 般若心経とは 全体像は実に明確で 詳細に亘って 矛盾は無く 完璧に記述されていることが分かります。

そしてその内容は これまでの仏教との継続性を保ちつつ 新しい概念を導入して壮大な宇宙観を説き そこに「宇宙の構造」と「人間と宇宙の関係」を徹底的に論理的に表現していることが分かるのです。

しかしながら 般若心経がこれほどまでに意味不明となってしまったことには幾つかの理由があります。

その理由の一つ目は 般若心経には空の三つの基本特質を示す語句として、現代の数学的論理手法に匹敵する見事な表現で、「不生不滅 不垢不淨 不増不減」と、三対の語句として明記されているにもかかわらず、この論理構造に気づくことなく、表面的に解釈して、重大誤訳を犯してしまったことにあります。

つまり、定説に惑わされて「空には実体が無いから 生も滅も無く 垢も淨も無く 増も減も無い」と正反対の意味に訳してしまったことにあります。

これは、般若心経の最重要箇所解釈に関する致命傷であり、「ゼロに何をかけてもゼロ」という強引で幼稚なへ理屈であり あまりにも無謀なこじつけであるといえます。

もし定説の「実体が無い空」を証明したいのであれば この三対の語句の選択の意味を明らかにし、さらにそれぞれを対立して示していることと しかも同時に否定することの、合理的で矛盾のない説明が必要となりますが 未だかつてそのような文献は一切存在しません。

詳しくは本文中で示しますが この語句の緻密な論理構造を前にして、著者が多少は得意とする現代の論理手法で注意深く解析することで解説し 空の持つ本来の基本三特質を正しく示し 定説の「実体の無い空」を完全否定しました。

意味不明となった理由の二つ目は 『空に関連する複数の語句「色 受想行識 諸法」は新しい概念を表すために再定義された語句である』と 本文中にこれも論理構造として明記されているにも係わらず これまで誰もそれに気づかなかったことにあります。

著者は自らの学術的研究の経験を通して、これらの語句の論理的構成の中に その再定義の証拠を発見したのです。

ここで明らかになった 「空」の「基本三特質」に立ち返り、さらに 関連語句「色 受想 行識 諸法」をその「再定義」の法則に従って解釈すれば あれほど難解だった般若心経は霧が晴れるように 見事にその全体像と緻密な部分像を現してきたのです。

意味不明となった理由の三つ目は きわめて論理的な空の特質の記述と再定義の導入により 敢えてその真実を隠し 二千年後に解釈することを意図したことによると思われます。

般若心経の真実は緻密な論理性によって堅く護られたまま 現代に至り 今やっとその論理を読み解くことが出来て 真理は見事にここに開花したのです。

その時が来て 今その難解な論理は解釈され ここに般若心経の全貌が明らかになったと私は考えています。

その結果は驚くべき内容であり その普遍的な内容から これは仏教の枠を越えた 人類共通の真理とすべき程のものです。般若心経の解釈結果はすべての人類の思想史を総決算する程のものと言えるのです。

般若心経は二千年後の私たちへのメッセージであり 現代の科学の発達を見越したような内容でさえあります。

しかも 現代人であれば それは心底納得のできる見事な真理であると言えます。

玄奘三蔵訳「小本・般若心経」を中心にしつつ 時々サンスクリット語原典に戻りながら 「大本・般若心経」をも参考にして読み解いていくことにします。

以下は 著者による般若波羅密多の体験を重ね合わせて読み解き 現代用語で著したものです。

ここで般若波羅密多の意味に関しては 少しずつ説明していきます。

般若心経は論理性に満ちているので 慣れない人には難しく感じるところがあるかも知れませんが 読者におかれては是非 厳密な論理的表現の背後に隠された 満ちあふれる情緒性を見失わないように 注意深く時間をかけて読んで下さることを 期待します。

【第一節】 般若心経の編纂とその背景

仏説摩訶般若波羅蜜多心経。

仏陀が説いた般若波羅蜜多の教え

【般若波羅蜜多とは】

般若心経には 僅か262 + 16文字の中に 6文字の「般若波羅蜜多」という語句が 6回も出現し 計36文字をも費やしています。よほど重要な語句であるらしいことはその出現回数からも明らかです。

そこで 般若波羅蜜多はそれほどの重要語句であるので ある程度の結論をここに示して 先に進みたいと思います。

『宇宙は物質と精神の両面において、次元を越えて連続する相似形の多層構造によって出来ています。この物心両面の相似形の連続した多層構造を「宇宙のフラクタル構造」と現代用語の造語で呼称することにします。

さらに、この宇宙のフラクタル構造に共鳴することをフラクタル共鳴と呼称します。

そこで、宇宙のフラクタル構造そのものを般若波羅蜜多と、そしてしばしばフラクタル共鳴により、宇宙のフラクタル構造に積極的に係わることをも般若波羅蜜多と定義します。

人は般若波羅蜜多によって、フラクタル構造の次元を越えて関わり合い、移動し、展開できる存在なのです』

般若心経はこの般若波羅蜜多の真実を現代に伝えるために 今ここに蘇ったのです。

ここに示した般若波羅密多の概略を知ってから 先に読み進めば 整理されて理解出来るようになっていきます。

【般若心経の成り立ち】

仏陀入滅後 仏教の混乱の中から 仏教の再生を目的として興った大乘仏教は 仏陀の悟りを継承する人達により 【空】を中心とする世界観とそれに基づく思想体系を構築しました。

しかしながら ここに明らかになった真実は 混乱の中に伝えられてきた初期仏教を正面から否定する内容であり それはあまりにも衝撃的な思想体系の出現であり、到底受け入れられない状況であったであろうことは想像に難くありません。

その状況を鑑みれば この時代は「実体が無い空」が全盛の時代であり 「実在」や「超実体の空」を前面に出して説く 般若心経を公表することは危険な状況にありました。

この状況の下で この革命的な真理を受け入れる環境は未だ整っていないと判断し このまま公表するのは時期尚早との結論に至りました。

そこで 複数の重要語句の定義を經典を構成する緻密な論理の中で示し そのまま説明や解説を加えずに 世に出すことにしたのです。

そして 後の時代になって いずれかの日に いずれかの地域に 般若波羅密多の体験者が現れてくることを期待したのです。そしてその整った環境で 般若波羅密多の体験者がこの經典を詳細に解析することで 壮大な宇宙観で構成した大乘仏教の神髄を この緻密な論理の中から正しく読み説いて 公表してくれることを想定したのです。

こうして 二千年後の未来において般若心経を蘇らせる計画を実行したのです。つまり この現代に 仏教の再生を託したのです。

【第二節】 趣旨説明

観自在菩薩

行深般若波羅蜜多時 照見 五蘊皆空 度
一切苦厄

観音様は 般若波羅蜜多の瞑想に入られたときに 五蘊 即ち「人間が生きる世界」には 『現象』と『事象』が展開していることを確認していました。

しかしながら 更に般若波羅蜜多の瞑想を深めていくと 『現象』と『事象』の範囲は確かに諸行無常であり 実体が無いのですが。実は その背後には《宇宙の理念》が厳然と存在していました。

しかも『現象』と『事象』には《宇宙の理念》が表現されていて 一切が必然で有り 一切が肯定されている と見定められたのです。

観音様は このように人間が生きる世界が《宇宙の理念》の下に秩序だっている状態を「皆空」と呼称しました。

そして観音様は この見定めに基づいて生み出した 衆生救済の方法を 以下のように示されたのです。

この節の末尾の「度一切苦厄」は玄奘三蔵によって付け加えられた語句です。このことで 観音様が人々を救ってくださると明記したことは 般若心経の価値を大いに高めたと著者は考えています。

般若心経の導入部がここに示されました。長文の「大本・般若心経」によれば 仏陀が主導する般若波羅蜜多の瞑想中に 観音様がシャーリプトラの質

問に答えるという舞台設定で 説かれたものであることが分かります。

これは史実としては何ら証拠が無いことから 架空の舞台設定と言えますが ここからは 混乱する時代にあつて 何とか仏教を再生し ここに仏陀の真意を示そうとする編纂者の強い意志が読み取れます。

先ず 般若波羅密多の真言を 解読された結果の形で以下に示します。

【第三節】 新しい生命観と再定義

舍利子、

色不異空、空不異色、

色即是空、空即是色、

受想行識 亦復如是

【空の基本三特質と再定義の結論を先に示しておく】

後に【第五節】で明らかになるように 色と受想行識をまだ知られていない 新たな人間の本質を示す語句として 緻密に計算し尽くされた論理性の中で「再定義」して示したのです。再定義に関しては特に重要ですので【第五節】と【付節】で詳しく示します。

文章の重要な区切りで 観音様はシャーリプトラに語りかけています。

シャーリプトラよ！聴きなさい。

ここで観音様は色と空の関係 及び色と受想行識の関係を以下のように説いたのです。

ここで示した再定義に従えば玄奘三蔵訳の 色不異空 空不異色の部分は・・・

色は人間の本质であり、その色は空に等しく、空は色に等しい。

となります。

この節では、空の説明が無いまま、色は空に等しく、空は色に等しいと説かれます。そして、空は【第四節】で明らかになります。

これだけでも 色と空の関係は十分に見えるのですが 後に諸法との意味の対比を示す必要性から この部分をサンスクリット語原典に遡ってより詳しく解釈することにします。

サンスクリット語原典では 色不異空空不異色 空不異色色不異空 色不異空空不異色 と 同じような繰り返しの文章が三対あります。

この節を深く理解するための予備知識として 色と等しいとされた空と【第四節】で説かれる空相についても 前もってその結論を示しておきます。

空を具現化した空相の【基本三特質】に関しては 後に【第四節】で詳しく述べることとなりますが その【基本三特質】は永遠性 絶対性及び普遍性です。

しかしながら厳密な議論をすれば 空相の【基本三特質】がそのまま空の【基本三特質】には成りません。

それは空は直接的には説明出来ない存在だからです。それだからこそここに空の直接的な説明が無いのです。

そして空は直接的には説明出来ないからこそ【第四節】において 空を具現化した空相の【基本三特質】を説明し 空を間接的に説明しているのが 般若心経の絶妙な説き方なのです。

この短い経典の中に どこまでも正確さを追究した実に丁寧な表現であると 感心せざるを得ません。

そこで この【第三節】では空の【基本三特質】には直接触れずに 直接の説明を敢えて避けながら その存在を前提として 空と色と受想行識の関係を見事に説いています。

この書では 分かりやすくするために 編纂者が避けた空の【基本三特質】の説明に関して 著者が敢えてそれぞれを「永遠性の根元」「絶対性の根元」及び「普遍性の根元」と表記して 解説を進めます。

これらの表記法に関しては【第五節】でさらに吟味します。

さて、やっと準備は整いました。

ここで空の【基本三特質】で色と空の関係を論じれば以下ようになります。

一つ目の「永遠性の根元」に関して

色は空と同じであり、空は色と同じなのです。

二つ目の「絶対性の根元」に関して

空は色と同じであり、色は空と同じなのです。

三つ目の「普遍性の根元」に関して

色は空と同じであり、空は色と同じなのです。

【繰り返し表現の意味】

玄奘三蔵訳では色と空の関係は色不異空 空不異色の一回だけの繰り返しですが ここに示したようにサンスクリット語原典に遡って確認すれば 三回繰り返しとなっています。しかも 二回目の繰り返しは空から始まっていて 空不異色 色不異空となっているところが特徴的です。

これ程の 短い経典にも係わらず 三回も繰り返すとは これがきわめて重要な部分であると判断できます。

さらに「空の基本三特質」の内の二つ 「永遠性の根元」と「普遍性の根元」に関しては 空から多様性をもって分かれた色から見たときに初めて意味が有るものとして その表現は色の立場から繰り返しが始まっています。

そして 残りの一つ「絶対性の根元」だけは分離の過程とその多様性に関係なく 空自身が本来的に持っている空側からの特質であるために 空の立場から繰り返しが始まっているといえるのです。

ですから この順番で表現することに意味があり この複雑な表現に矛盾は無いことが分かります。

さらに「空は実体が無い」とする定説では 全く意味を成さないことは明らかです。

それから 後に厳密な議論をしますが、空と色 色と空と 方向を変えて繰り返す表現の意味は この関係が「必要十分条件」という論理的表現であると 現代人であれば理解出来ます。あえて論理的表現をしなければ それは単に、色と空は常に等しいと言う意味のことです。

【人間の本质】

人間の本质は 再定義された色と受想行識との二つから成り立っています。

それは即ち 空から 個性と役割を持って分かれた「霊体」としての色 と その色が生み出した精神作用としての受想行識の二つなのです。

ここで空とは 全ての色と受想行識の母胎となる真の实在であり 存在の本質であり 究極の存在なのです。

人間とは 色と受想行識の共同作業で 空から地上に降りてきて 空の中から《宇宙の理念》を展開している存在なのです。

これが宇宙の生命活動なのです。

玄奘三蔵訳ではサンスクリット語原典の三回繰り返しを一回の色不異空、空不異色の繰り返しの纏めました。もちろんその事に論理的矛盾はありません。そしてさらに色即是空空即是色の部分を追加したことによって般若心経は補強されたと考えています。即ち・・・

色は、しばしば空に帰還し、そして再び空から色に戻ることができるのです。

【空への帰還と霊体としての色】

ここは色即是空空即是色の部分です。玄奘三蔵訳に戻り 玄奘が意味を追加した部分と思われます。つまり色は その役割を果たすために 空から『現象の世界』にまで降りてきて 肉体と結合し 《宇宙の理念》の下に生命活動を営みます。

受想行識は 「霊体」である色が自らを変質させて生み出した生命体の 精神作用の部分であり 色の主導の下に 肉体の精神作用に結合し 『事象の世界』で活動することができる存在であり 現実世界で生命活動を展開する役割を持つ 人間のもう一方の本質なのです。

色はしばしば、そして一時的に空に帰還し、空から『事象の世界』に戻って活動することが出来るのです。

一方後述するように、人間は生涯をかけて空に帰還しつつ、空の立場から現実の世界に働きかけることを示しているのです。

色は本来空なので、色が空に帰還できるのは当然と言えば当然なのです。その当然のことは人間が生きていく上で重要な意味を持ちます。

受想行識は色とまったく同様に、空の【基本三特質】に関して、空そのものです。

ですから、**受想行識は色**と一体化して、**空**に帰還 できます。

色と**受想行識**は霊体とその精神作用であり 常に一体ですから どちらも**空**と同じとして扱うことが出来る事になります。

【再定義にそつて解釈してこそ 初めて意味が明確になる】

このように 般若心経においては【**空**】と【**色・受想行識**】及び 次節に出てくる【**諸法**】を 新しい宇宙観を示す新しい概念を持つ語句として 般若波羅密多の原理に従い 再定義したのです。

さて【**色・受想行識・諸法**】が再定義されているという事実は【第五節】の語句の配列の論理性の中に隠されていたことが発見できたのです。そしてこの論理性こそが 時代を越えても言語が変わっても 決して変わることはない 再定義の決定的な証拠を今に残しているのです。

(※再定義の証拠は重要ですので その詳細を本文の文末【付節】に示しました)

【**空**は定義しがたい存在】

ここで【**空**】とは大乘仏教の根幹ですが これは定義し難い 究極の存在です。【**空**】を定義できない理由とは それは明らかかなことなのです。

ここでしばし私たちの住む世界を俯瞰した視点で捉えて そこでよく考えてみましょう。私たちの言葉は 常に私たちの世界の中で生活した経験を下にして生まれた言葉から成り立っており それ以外の世界を前提とはしていません。ですから【**空**】という私たちの世界以外の世界を私たちの世界の言葉で表現することはほぼ不可能に近いことなのです。私たちの言葉では【**空**】の世界を表現するための語彙が決定的に不足しているのです。

私たちの言葉で言えることは【**空**】とは宇宙の根元であり 《宇宙の理念》であり 完全な存在であり 超実体であるということだけです。しかし 般若心経では言葉を駆使して その詳細にまで踏み込んでいます。それは【第四節】【第五節】で示されることになります。

そして【**空**】とは説明も出来ず 名を付けようのない究極の存在ですから 直接的に名付けることを避け 修行によって 「心を空しくした時」にのみ それを体験できることから 「そこに至る手段」と「その時の心の状態」をもって呼称することとし それを【**空**】と名付けたのです。

空相の特質を示す【基本三特質】は【第四節】で明らかになります。

このように 人間は常に空の〔基本三特質〕としての「永遠性の根元」と「絶対性の根元」と「普遍性の根元」を同時に 矛盾無く 合わせ持ちながら 生命活動を展開することが出来るという真実がここに示されたのです。

これは価値の混乱する現代においてこそ 特に重要な意味を持つてくることになるのです。

【第四節】

「生命活動の場の根元」と再定義及び「基本三特質」

舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減

続いて 諸法と空相の関係について やはり論理の中に隠して 「再定義」して示すのです。観音様は諸法を人間の生きる「生命活動の場の根元」として以下のように説くのです。

シャーリプトラよ！よく聴きなさい。
ここで 諸法とは空相に所属している存在です。
そして空相とは空が自らを変質させ具体化することで形式的に表現し空の特質を受け継いでいます。

つまり 諸法とは 空相という「環境の根元」に所属し 「生命活動の場の根元」となる複数の法の集合なのです。

ここで諸法とは法の複数形ですから、「生命活動の場の根元」の「法」の集合を意味しています。

空相に所属する諸法の さらにその中の一つの法は当然「基本三特質」を持ちます。そしてその法は法の外側に 人間が生きる環境として つまり五蘊の一部として 諸行無常の「世界」を創り出しています。

次節で説かれますが 法の外側には 自ら生み出した「世界」があって 法はこの「世界」の中で展開する『事象』と『現象』を制御し管理していることを意味しています。

ここで『事象』とは 物質の『現象』に人間的意味を与えていて 精神性の環境を意味しています。

【現代宇宙論との対応】

現代宇宙論との対応を見れば 諸法とは人間が考え得る最大限の宇宙に対する「全宇宙の根元」を示しています。

そして 諸法の中の一つの法は一つのビッグバン宇宙の背後にあって、そ

の法に特有の『事象』と『現象』を制御し管理しているものと定義しましょう。

その時、ひとつひとつの法が管理する世界の中には、独自の世界があって、独自の生命活動が展開していることになります。

一回のビッグバンで生まれた宇宙はこの一つの法の中で発生したと考えられます。さらに諸法とは法の複数形であることから、空相の中には法の数だけのビッグバン宇宙が生まれていることになります。

「世界」はこの諸法の中の一つの法による一つのビッグバン宇宙に所属し、人間は物心両面においてこの環境に一切を支えられ守られて生きているのです。

私たちの所属する法は諸法の一つであり、諸法は空相に所属し、空相は空を具現化したものですから、法は空の性質をそのまま受け継いでいます。

諸法はここに、様々な「生命活動の場の根元」全体として再定義されたことになるのです。

既に述べたように、ここで、空は究極の存在であり、直接説明することはきわめて困難です。そこで空を具現化した空相を通して、さらに空相に所属する諸法の持つ特性を【基本三特質】として、結果的に空を間接的に説明することにします。

ここで直接的にではなく、何故間接的に説明することに合理性があるのか、たとえばそれは諸法と空相と空は般若波羅密多の関係に有るからそれが可能なのです。

現代用語で言い換えれば、諸法と空相と空はフラクタル構造を成している、フラクタル共鳴の関係にあるから、それが可能なのです。

般若波羅密多の意味がかなり明確になってきたと思います。

さて次に、既に結論は示してきましたが、いよいよ【基本三特質】について詳しく説明します。

その〔基本三特質〕の一つ目は「不生不滅」であり、永遠性を表しています。

つまり、生と滅を超越し、完全なる存在の表現として、時間を超越して存在し続けていることを意味します。

従来は「空は実体が無いから 生まれることもないし 滅することもないとする解釈が主流でしたが 本書では 「空は永遠の存在で 超実体として存在し続けているのだからこそ 今更生まれることも滅することも無いのだ」と解釈します。

ここでは 生と滅という意味の対立する語句のそれぞれを同時に否定して それらの対立する概念を超越したところに永遠性という新たな概念を創り出しています。

ただし「永遠性」という語句そのものが 現象の世界の中のある特殊な状態を表現する語句であるため 現象の世界の「永遠性」という語句を如何に駆使しても 未だ現象の世界の外側には出られていないこととなります。

現代用語でそれを「時間を超越した世界」と言うことも可能ですが それでもまだ 現象の世界の外側に出たことにはなりません。

そこで般若心経では「不生不滅」として 現象の世界の時間軸の両端の 互いに相反する状態を同時に否定することで 現象の世界の外側に出ているのです。つまり この手法によって現象の世界の外側の 空の世界を表現しようとしているのです。

この表現法をここでは「自己排除的二元超越法」と呼称します。これは現代でもこのまま通用する 見事なまでの数学的論理であると言えます。

ただし、ここで自己排除的二元超越法によってやっと到達した 空の世界の一つの特質を、一言で適切に表す語句は存在しないので、今後も「永遠性」という語句を遣い続けることにします。

次に〔基本三特質〕の二つ目は「不垢不淨」であり、絶対性を表現しています。

つまり、善と悪の対立から成る二元論を超越し、そして相対価値を超越した絶対価値を表現して

いて一元論的に、人間による生命活動の精神性の中心的支柱となっているのです。

従来は「空は実体が無いから 善も悪も無い」とする解釈が主流でしたが 本書では「空は完全な存在で 超実体だからこそ 二元論的な善と悪の対立は無く 善悪を超越した絶対の存在である」と解釈するのです。これも自己排除的二元超越法であることに注目して下さい。

さて 次は【基本三特質】の三つ目ですが 玄奘三蔵版では「不増不減」と訳されています。

従来は「空は実体が無いから 増えることもなく 減ることもない」とする解釈が主流ですが 玄奘三蔵は「空は超実体であり 同様に諸法は増減のある『現象』と『事象』の展開する「世界」ではないから つまり諸行無常の世界ではないから 不増不減である」と翻訳したのです。

それは即ち 変化変容する諸行無常の「五蘊の一部の世界」を否定し 増と減を繰り返す「『現象』と『事象』の展開する世界」を否定することで 増減の無い不変にして普遍である世界として 諸法を位置づけています。

ここには玄奘が本質を正しく理解した上で 玄奘による自己排除的二元超越法として とても分かりやすく表現した高度な工夫が見られます。

この玄奘の翻訳は本書の解釈と基本的に同じ立場にあることが確認される重要な証拠であると言えます。

【サンスクリット語原典に戻って確認する】

ところで本書では敢えてサンスクリット語原典に戻って解釈し 元々の意味を確認します。

サンスクリット語の原典に遡れば 諸法の持つ三つ目の特質はより明確になります。そこには「欠損があるのでもなく 完全に満ちているのでもない。(文献一)」と記述されています。これを仮に「不欠不満」と表記しておきます。これも自己排除的二元超越法と言えます。

空は空相として、多様的に表現され、そこに欠損はなく、しかも空相が完全に諸法で満たされることはないのです。

この意味を 例え話で分かりやすく説明してみましよう。

ここに「美しさ」の表現された花という対象とその花の持つ「美しさ」という高度な概念を考えると 世界には沢山の種類の花があって そこには花の多様性があり どれも「美しさ」を持っていますが それで「美しさ」の全てを表現したことには成りません。 沢山の花は決して無限ではありませんが、そのことで「美しさ」の概念に欠損があるわけではなく そして同時に「美しさ」の概念が全て満たされているわけではない という意味になります。

読者におかれては この部分を何度も読んで「不欠不満」の意味を諸法と空相との関係に置き換えて 理解を深めてくださることを望みます。この真実を正しく知ることが独善の無い 普遍的な愛を知り 世界の恒久平和の姿を理解することに繋がります。

ここで諸法空相を現代的に論理表現すれば 「諸法は空相である」となり 「諸法であるためには 空相であることが〔必要条件〕である」ということになります。

この意味を補足すれば 色と空の関係は〔必要十分条件〕であるが 空相と諸法の関係は〔必要十分条件〕ではなく 〔必要条件〕であると主張しているのです。

この関係を平たく言えば 色と空は全く等しいが 空相と諸法は対等ではなく 諸法は空相の一部であると言っていることになります。

これはとても緻密で厳密な論理です。次第に明らかになりますが この表現にはとても深い意味があります。

【複数形であることの意味】

ここで 諸法とは複数形の法であることから 空の表現としての空相は多様性をもって表現されることを示しています。このことは普遍性につながります。

ちなみに 現代宇宙論的に言えば 時間・空間・エネルギーとは諸法の中の 私達の住む一つの法に所属する「ビッグバン宇宙」の基本構成要素であり 一つの法に固有の存在であります。私たちの知っている物理法則はこの一つの法の中でのみ有効であり 他の法では別の物理法則が成立すると考えられます。

つまり 私たちが直接認識できるのは私たちが所属する一つの法の中のほんの一角なのです。

【論理性はどこに所属するか】

さらに 重要概念を以下に補足します。

ここで私が誰に断ることなく 頻繁に遣っている 「論理」とか「論理性」とはそもそも一体何なののでしょうか。論理はどこに所属するのでしょうか。

般若心経でも この論理性を前提に 緻密な論理によって 議論が組み立てられています。もし この論理が非実在で 「無」に帰する存在であるならば ここで示している議論そのものが無効になります。錯覚の上に錯覚を積み上げるようなものです。

そこでですが ずばり 論理は**空相**に所属します。**空相**に所属するから **空**の具現化した存在として 論理性が意味を持つのです。

そしてさらに 宇宙のフラクタル構造によって**空相**は**空**に所属しますから 「論理性の根元」は **空**に所属します。

論理性はすべての**色・受想行識** そしてすべての**諸法**に有効であるという意味にも成ります。

ですから その点を良く噛みしめて 安心して議論を先に進めましょう。

諸法とは**空**自身を多樣的に、多面的に、多層的に表現した**空相**であり、複数の**法**から成っています。

さらに**諸法**とは **空**自身の性質の投影として、**空相**の中に多様性をもって表現されています。

空相の中に複数の**法**、即ち**諸法**が多様性をもって表現されていて、それでいて、**空相**の性質として、決してそこに欠損があるわけではなく、しかし**空相**の中に**諸法**が完全に満たされることはなく、それでいて**空相**の性質の普遍性が完璧に確保されているのです。

これは現代の表現では「多様性の中に普遍性が保たれること」を意味していることになります。これは人間による生命活動の精神性の基盤となっていて、愛や平和の概念を生み出しているのです。

従って「基本三特質」の三つ目は「不欠不満」であり、普遍性を表現していることになります。

【多様性の中に普遍性が表現される】

諸法は法の複数形ですから、その帰結として《宇宙の理念》は多様性を持って、しかも普遍的に表現されることを示しています。

一方、色・受想行識は単数形で表記されていることから、その個性には多様性があっても、種類としては一種類であることを意味しています。分かりやすく言えば、宇宙のどこに行ったとしても、宇宙人といえど、人間と別ものではなく、その本質は色・受想行識であるということです。

ここまで空・色・受想行識・空相・諸法について詳しく述べてきましたが、未だ触れていないこととして、最初に登場した諸行無常の「五蘊の一部の世界」と、それ以外の「空の世界」との関係の説明したいのですが、まだまだ説明のための語句が不足しているので、詳細は【第五節】で述べます。

【第五節】 空中とその外側の存在

是故空中、無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界

これ故に、空中には、「初期仏教が説くような人間と世界」は存在しません。

この節の文頭には「是故空中」とあります。是故とはその前の[第三節]と[第四節]で既に説かれていることを受けています。

それは即ち [基本三特質] を示す空 空相 諸法 及び空に等しい色・受想行識 は空中の存在であるとの記述を受けて その空中には「無」以下の色・受想行識等の 初期仏教の語句で表されるものは存在しないと記述されているのです。

つまり こここそが「再定義」が明確に示されているところなのですが これは特に重要なので 最後の[付節]に論理的に詳しく示しておきました。

そこで・・・以下のようになります。

空 空相 諸法 色 受想行識から成る空中には、初期仏教が説く旧語句 即ち[色・受想行識・眼耳鼻舌身意・色声香味触法・眼界から意識界まで]無いのです。

重要な部分なのでさらに詳しく見てみましょう。

初期仏教が説く色と受想行識 即ち人間の肉体と、肉体に付随する精神作用は空中には存在しません。

さらに初期仏教が説く受想行識が作る世界 即ち人間の五感の知覚・認識 及び五感による認

識の対象となる世界は諸行無常でありそれは眞実の世界ではないから **空中** という眞実の世界の中には存在していません。

つまり、私たちが五感を通して認識する対象の世界は眞実のものでは無く、諸行無常であり、実体が無く、これは錯覚なのです。そして、これらの錯覚が生み出す意識の世界そのものが実体は無く、これ単独では錯覚に過ぎないのです。このように初期仏教はこの錯覚の世界、実体の無い世界、「無」の世界に留まっていることとなります。

しかしながら、ここで驚嘆すべきは [第三節] と [第四節] で示したように **空中** には [基本三特質] を満たす実在の世界が存在するという眞実です。

そして人間の本質である **空・色・受想行識** と、環境の根元としての **空相** 及び生命活動の場の根元としての **諸法** は、この **空中** の存在なのです。

言い換えれば **空中** には **空** そのものの「霊体」としての **色** とその精神作用としての **受想行識** と、**空** を具現化した **空相** 及びそれに所属する **諸法** が実在しています。

そして **空中** の外側、つまり「**空外**」は、諸行無常の世界であり、錯覚の世界ですが、肉体としての **色** とその精神作用としての **受想行識** と、五感の認識の対象としての環境即ち **法** が、非実在ながら存在しています。ここで **法** は「生命活動の場

の根元」と再定義しましたから、一方の**法**は「生命活動の場」そのものとなります。

つまり**諸法**は初期仏教の語句の**法**との関係で再定義されていることとなります。

法がやっと出現したことにより、ここではじめて「『現象』と『事象』の展開する五蘊の一部の世界」とは**法の一部**であると言えるのです。具体的には地球とその周辺程度と、それが持つ精神性を含めた範囲と考えられます。

つまり、この**法**の背後にあって、**法**を管理するのが再定義された**法**ということとなります。

整理すれば、**色**と**色**が**受想行識**と**受想行識**が、そして**諸法**と多くの**法**が対応していて、それらは全て宇宙のフラクタル構造の一部です。

そしてさらに、**空**と「**色**・**受想行識**」と「**色**・**受想行識**」が、さらに**空**と**空相**と**諸法**と多くの**法**も、フラクタル構造の一部と成っていて、般若波羅密多の「瞑想」と「行」によって、フラクタル共鳴の関係に至るのです。ですから、そこは単に錯覚の世界というのではなく、生命活動として、《宇宙の理念が表現された状態》なのです。

このように次元を越えて連続する相似形の関係が「宇宙のフラクタル構造」なのです。そして、「宇宙のフラクタル構造」は〔基本三特質〕の三つの軸として、フラクタル共鳴を発生させるのです。

正にこれこそが大乗仏教の神髄であり、般若心経の説く宇宙観なのです。

このように人間は空の外側に肉の身を置きながら、空中の世界に達することが出来る存在なのです。何故なら「人間は本来 空の住人だから」なのです。

ここに般若心経においてはじめて大乗仏教の神髄として色・受想行識・諸法が空中の存在として示され、一方空中の外側には初期仏教の色・受想行識・法を「宇宙のフラクタル構造」として位置づけたこととなります。

ここまでで宇宙のフラクタル構造を理解することで般若波羅密多の意味はより明確になったと思います。

【諸法と法の境界】

色・受想行識と色・受想行識との対応は既に述べましたが、ここで諸法と法との対応について、さらに追加しておきましょう。

時間と空間とエネルギーは空中の諸法に所属し、その中で生まれる物質は空中の外側の法に所属すると言えるでしょう。その物質が時間軸上で様々な核反応や化学反応によって性質を変え、その密度や分布によって多様な現象を作っていくのは全て法の世界なのです。

このように時間と空間とエネルギーは我々現代人が知っている諸法の一部であり、法としての物質も我々現代人が知っている法の一部です。

【二つの問題提起】

ここで諸法と法の境界と、その内容の分類に関して二つの問題提起をしておきます。

この書では物質が生まれるビッグバンの直後をその境界としました。現代物理学においては時間・空間の発生については明確ではありません。ですから諸法と法の境界については今後議論が出てくることでしょう。

ただしこれはどこまでも定義の問題であり、領域間の線引きの問題であり、どちらにしても宇宙の本質は何ら変わりません。

二つ目として、実は諸法も法も精神作用を含んでいることは明らかですから、現代人が知っているのは物質面からみた諸法の一部と法の一部ということになります。

現代科学では精神作用をもつ何らかの対象に関しては一切不明なのです。例えば法に所属していて物質に作用する「精神の作用子」という概念は未だ現代科学には存在しません。

ましてやその「精神の作用子」に対応していて その根元において制御し管理しているであろう 諸法に所属する「精神の制御系」というものは 現代科学においてはまだまだ未知の分野です。

【フラクタル構造のまとめ】

空中の存在 即ち空と空相 色・受想行識・諸法は 初期仏教で説かれた世界の中には存在せず 初期仏教では説かれていない 全く新しい概念なのです。

ここまでの表現から既に明らかですが 色・受想行識・諸法は初期仏教の旧語句 色・受想行識・法とフラクタル構造をなしているという重要な真実が見えてきます。

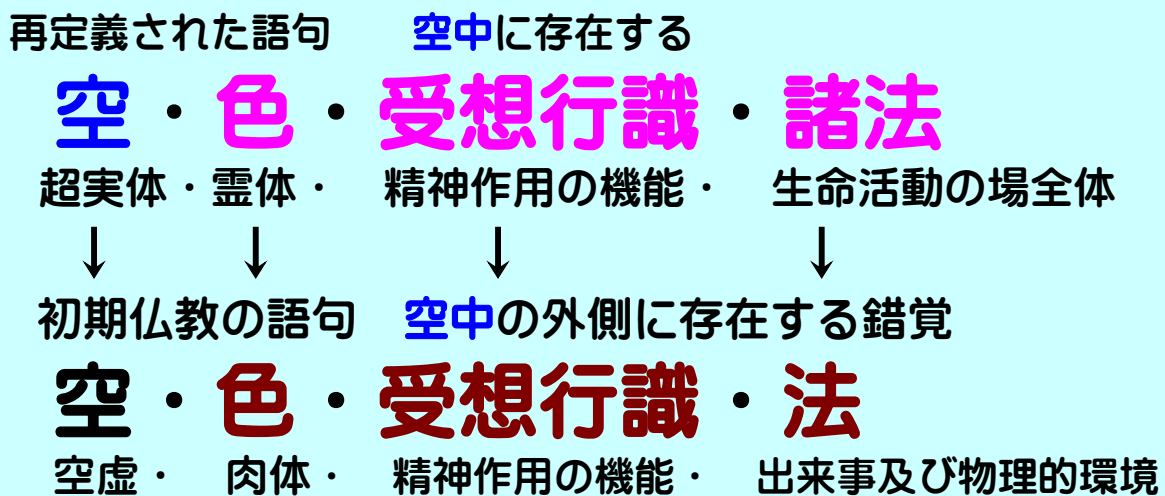
そして既に明らかですが ここに「敢えて同じ語句を遣って再定義した」ことの意味も必然であったと言えるのです。実に見事な論理構成であると分かります。

つまり 再定義された語句とそれに対応する旧語句とは 同時に議論される限り フラクタル共鳴の関係にあることを示しています。

そして旧語句が単独で議論される限り それは「空中」から孤立した語句であり 否定されることになります。

さて 色・受想行識・諸法と色・受想行識・法が対応して フラクタル構造を構成していることから 現実の世界は宇宙の投影であると言えるのです。

つまり投影された現実の世界がフラクタル構造を成していて フラクタル共鳴に至るのは これは必然なのです。



ここに般若波羅密多の意味がより明確になってきたといえます。

このように ここまでで 大乘仏教が語る実在としての「**空中**の存在」と 初期仏教が語る世界 即ち「無」とすべき非実在としての「**空外**の存在」と 二つの領域にきれいに整理されたこととなります。

さらに この「**空中**の存在」と「**空外**の存在」がフラクタル構造を成して いて 般若波羅密多の「瞑想」と「行」により そこにフラクタル共鳴を求め て生きることが人間の生命活動であるのです。

ここまでにフラクタル構造として整理された真実は きわめて重要視すべき事です。

【基本三特質に関する表記法】

さてここで **空**の【基本三特質】に関する表記法について吟味しておきます。

これまで【基本三特質】は永遠性 絶対性 普遍性と表記してきました。この表記は「**空外**」と「**空中**」と どちらにも一貫している【基本三特質】として表記するものとししました。

しかし 第五節以降での色別の表記法に従えば 「**空外**」では 永遠性 絶対性 普遍性であり それらに対応している「**空中**」では永遠性 絶対性 普遍性 となります。

そして 「**空中**」であっても 【第三節】でそうしたように **空**そのものの【基本三特質】を 特に限定して表記する必要があるときには 「**永遠性の根元**」「**絶対性の根元**」「**普遍性の根元**」と表記します。ただし 表記が複雑になるので そうすべき特別の理由が無い限り 以降もここまでと同じように永遠性 絶対性 普遍性と表記します。

【第六節】 初期仏教の否定と その後の肯定

無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得

般若心経は般若波羅密多による新しい宇宙観を説くからこそ、**空中**の外側を説いた初期仏教の十二縁起 四諦の旧経典を完全否定しています。

即ち 初期仏教の代表的な経典である十二縁起の文頭と末尾を「無」で否定することで。さらには四諦の要素である苦 集 滅 道を「無」で否定することで、これらの経典全体を否定しています。そして、これらの経典には智もなく得も無いと断言しています。

ここは般若心経の特筆すべき箇所で 仏教再生には欠かせない所です。

即ち 「出来事を因縁因果によって解釈し、そこに人生の苦の原因を求め、苦の分析に陥ることは人生の本質ではなく、間違いである」と明確に説いていることに成ります。初期仏教の世界だけでは、何をどのように分析解析しても、苦は解決しないという意味です。

釈迦入滅後の 混乱する時代に扱われていたこれらの初期仏教の経典は、これまでのように**空中**の実在を無視しているために、般若波羅密多から孤立した存在と位置づけられます。従って、それらは無とすべき非実在の存在であり、錯覚ですから、全て否定されるべきものです。

従って、そこには智慧も無く得るものも無く、これらは悟りには全く関係がないと断言するので

す。

前節〔第五節〕とこの〔第六節〕で空の立場から「無」として否定したのはすべて孤立した「初期仏教の世界」の内容です。

しかしこれらを一旦「無」として否定することで孤立していた「初期仏教の世界」を宇宙のフラクタル構造の中の一部として位置づけなおすことになります。そこではじめて観音様が般若波羅密多の行の中で照見されたように五蘊の世界は生まれ変わり肯定されることになります。

即ち般若波羅密多とは五蘊の世界を宇宙のフラクタル構造の全体としてそのまま全肯定する教えなのです。

そしてそれはそのまま次の〔第七節〕の般若波羅密多の「行」として位置づけられることになります。

【五蘊の世界とフラクタル共鳴】

以下に宇宙のフラクタル構造として肯定された五蘊の世界を述べておきます。

既に話したように五蘊の一部としての『現象』と『事象』の世界単独では空の持つ〔基本三特質〕の三つの条件を満たしていないことは明らかです。

ところで最初に観音様が照見されたように『現象』と『事象』は《宇宙の理念が表現された状態》であってはじめて「空」に共鳴しフラクタル共鳴であるといえます。

一方皆空とはサンスクリット語原典に遡ればそれは形容詞で記述されておりこれ以外の空のように名詞の「空そのもの」という直接的な記述ではありません。

皆空に対応しているサンスクリット語は「自性で空に似た・・・」或いは「自性で空のような・・・」という曖昧さを持った表現となっていることからそこに矛盾は無く見事に整合がとれていることになります。

さてしかしながら観音様ではない我々人間は現在という時間の断面で見ているのであり我々から見る「五蘊の一部の世界」は諸行無常であって時間の断面で見る限りこの世界には実体は無いのです。

そこで人間は永遠性の無い限定された時間と空間の広がりの中に絶対性と普遍性を追求することになります。これが現実の生命活動です。

そしてそのことは更に人間の生きる価値観にも反映されてくるのです。

つまり人間は「五蘊の一部の世界」即ち時間と空間に限定されたこの世界に「空」を投影することになります。

永遠性の無い世界に 宇宙のフラクタル構造を信じて 絶対性と普遍性を表現することになります。

【観音様から見た五蘊の世界】

観音様からは皆空と観える世界は 人間からは善悪の対立や神と悪魔の対立が有るように見えますが 観音様から観ればそれは錯覚であり そこには多様性と多層性が有るのみです。

従って観音様からは 「基本三特質」の二つ目の絶対性は 決して 善悪としての二局的にではなく かといって 全て均一化された平面的にでもなく 必然的に多層化されて観えていることになります。

観音様から見える『現象』と『事象』が展開する世界 それは「五蘊の一部の世界」ですが・・・

そしてもちろん観音様の見解が最も本質的ですが この多様性と多層性の価値観は常に絶対性と普遍性を求めて進行し 流動していきます。

ですからもしこの動きを固定化しようとする と それは般若波羅密多に反することになります。

ですから 般若波羅密多の中にあれば 『現象』と『事象』が展開する世界は決して固定的ではなく 常に流動的であり 変化変容しながら絶対性と普遍性に向かいますが 時間軸全体を見渡せば 既に絶対性と普遍性は表現されていることを発見することが出来ます。

従って 《宇宙の生命活動》とは 部分の諸行無常や部分の変化変容の現象や事象ではなく その背後に展開する人間的意味にあるのであり その人間的意味にこそ『現象』と『事象』が展開する世界の本质があるのです。

そこで その人間的意味とは・・・。

「基本三特質」とは時間と空間の中に 絶対性と普遍性を表現する事です。それが我々現実を生きる人間にとっての般若波羅密多といえます。

言い換えれば 『現象』と『事象』が展開する世界に《宇宙の理念》を表現するために それはつまり「基本三特質」を表現するために人間は活動しています。

そして人は絶対性と普遍性を表現するために 自らの使命と自らの立場が宇宙の多層構造の中に多層的に多層的に位置づけられていることを発見するのです。

【論理性の下に情緒性は存在する】

『現象』と『事象』が展開する世界に《宇宙の理念》をあまねく表現するとは それを分かりやすく言えば まさに「愛」と「平和」のことです。

そして 絶対性と普遍性は両者で一体であり 真実の「愛」や真実の「平和」は常に絶対性と普遍性を一体化した中で成されなければなりません。そして絶対性と普遍性の微妙なバランスの中に それは即ち進歩と調和のバランスの中に 情緒性も生まれてくることになります。

情緒性は 絶対性と普遍性に基づいた幹となる価値大系の骨格が無ければフラクタル共鳴に至りません。また 同様に論理性の表現は情緒性の裏付けがなければ空中には存在できないのです。

まさに般若心経がそうであるようにです。

従って 情緒性はすべての諸法に共通していて 空相に所属します。そして当然 般若波羅密多に従い 情緒性はその根元において空に所属します。そして緻密な論理性と共に 論理性と同じ次元で情緒性が語られています。

ところで 先に述べた論理性と ここで述べた情緒性が どちらも 空を具現化した空相に所属するという真実は これは人類にとって大いなる救いの言葉であり 何か我々に大きな安心を与えるものが有ります。

ここに人間が生きるための重要な「キー」が隠されていると思います。

ですから 絶対性と普遍性の無い行為は 「愛」や「平和」に似ていてもそれは「愛」でも「平和」でもなく 独善の中での独りよがりの屁理屈や執着に過ぎないことになります。

さてそこで 悟りとは自らの人生を通して この絶対性と普遍性を 限られた時間と空間の中に表現することに他ならないのです。それはこの『現象』と『事象』が展開する世界に《宇宙の理念》を表現することに他ならないのです。

まさにこれこそが時間と空間が制約されたこの世界での 絶対性と普遍性の表現の意味なのです。

【第七節】 悟りの方法

以無所得故

菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提

続いて「ここで否定された旧語句と旧經典には悟りにとって、何ら得る所は無い」という理由で、以下に「悟りの方法論」を説きましょう。

地上に生きる修行者は、これら旧語句と旧經典を破棄して、般若波羅密多に帰依したから、心に障りが無くなり、障りが無くなったから、明日を恐れる不安や恐怖が無くなったのです。

そしてさらに、世にはびこる「実体が無い空」とする、天地がひっくり返った、根本的に間違った認識の一切を捨てることで、はじめて涅槃という悟りに達することができたのです。

そして、天上の修行者、即ち過去現在未来を同時に生きる三世諸仏は、般若波羅密多に帰依したことだけで、阿耨多羅三藐三菩提という、完全なる悟りを得ることができたのです。

地上の世界の悟りと天上の世界の悟りと、二つの悟りがあることになり、それは即ち、死後の世界が存在する事実を明確に示していることになります。

ただし、天上の世界といえど、そこは「空中の存在」ではなく、その外側のつまり「空外の存在」なのです。ここはやはり『現象』と『事象』の世界ですから、般若波羅密多の「瞑想」と「行」により、自らの意志で悟りに到達することが求められるのです。

ここは思考と行動が一致する世界なので 自らの意志により般若波羅密多に徹底して帰依することで一気にフラクタル共鳴に至り 阿耨多羅三藐三菩提という 完全な悟りを得ることが出来るのです。そして もし般若波羅密多に帰依する意志がなければ 天上の世界といえど 決して悟には至らないことをも意味しています。その点 この地上の体験を通して学ぶことは大きいのです。

さて 地上の世界で悟りを得るには【心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖】とありますが これは決して簡単なことではないのです。

この記述の中には修行の「本質的な意味」が見事に秘められているのです。

その最も本質的な意味を示せば以下ようになります。

先ず【心無罣礙】とは【第五節】で示された無色・無受想行識から始まる「無の修行」の中で 特に最後の「無意識界」に徹底することを意味しています。

それは即ち 瞑想により受想行識の活動を極力低めて 意識を越える「行」の実践を意味するのです。

この「行」により 「心に一切の引っかかりを残さない【心無罣礙】」の状態に至ることができます。これも般若波羅密多の「瞑想」と「行」の一部です。

「空」の名称の由来とも成っているように これは心を空しくして空に至る修行なのです。

そして これまでの習慣的な思考を積み上げてきた受想行識とは「空外の色・受想行識」であり 意識を一旦「無」にして到達する思考とは受想行識に依るのであり 本来の「空中の色・受想行識」であることとなります。

本来 色・受想行識は自らの意志で色・受想行識の主導の下に入らなければならないのです。これには色・受想行識による徹底した判断の放棄と色・受想行識への帰依が必要です。

これは般若波羅密多の「行」の一つですが これを完璧にこなすことはなかなか困難であると知るべきです。

【最も困難な「無意識界」の修行】

ここで 空中と空外を強調して説明しましょう。この「無意識界」の「無」の「行」を成就するためには 「空外の色・受想行識」に従属した意識の一切を切り離さなければなりません。

そのためには それなりの決意をもって「行」に臨まなければなりません。これには命をかけるほどの決意が必要なのです。しかもこれは「何なにしたから悟れる」という「交換条件」でも、ましてや瞑想の「技術」でもないのです。ここには正に 誠実に生きるという、人間性そのものが強

く求められているのです。

その上で、これを成就するには、これまでの習慣的思考を一切捨て去る「行」に徹底しなければなりません。習慣的な思考とは「空外の色・受想行識」による思考のことであり、これはこれまで「空中の色・受想行識」の主導を無視して創り上げた「仮の自分」を一切捨て去ることを意味し、これを実践するにはそれなりの覚悟が要るのです。そして、それなりの覚悟無しにはこの「行」は滅多に成就しないと知るべきです。

人間は「空外の色・受想行識」に生まれながらに縛られて生きてきた存在です。言い換えれば、これまでは「空外の色・受想行識」の配下に有り、真の自分である「空中の色・受想行識」を無いものとして「仮の自分」を自分と錯覚して生きてきたことになるのです。

十年単位の期間、この「行」を徹底的に実践することで、これまでの肉体にまつわる「空外の色・受想行識」に従属した意識を一旦切り離し、そのことで「仮の自分」を切り離し、やっと「空外の色・受想行識」の支配を打ち破ることができるのです。

そしてさらに、最も大きな障害と成っている「実体の無い空」を排除できて初めて、本来の「空中の色・受想行識」主導の下での「空外の色・受想行識」に生まれ変わることが出来るのです。

こうして、真の安心に満ちた涅槃の境地に至ることが出来るのです。そうして、見事に明日への恐怖は取り除かれます。

この「仮の自分」を一旦捨て去るプロセスを無くしては、真の悟りは存在しません。

「仮の自分」を真の自分と信じている限り、人間は苦しみ続けます。

自由も平等も、個の権利も義務も、命の大切さも人間の尊厳も、現代の価値はすべてこの「仮の自分」を中心に組み立てられた価値体系です。

「無意識界」の「無の修行」の最後には、これらの現代の価値体系をも一旦リセットすることで、最終的に絶対普遍の価値体系に到達できるのです。

「空外の色・受想行識」の意識をいくら訓練しても、「空外の色・受想行識」をいくら磨き上げても、知識を詰め込んで、その知識を切り売りして人に教えることは出来たとしても、そのことで悟ったつもりには成れても、そこに悟りは一切無いのです。「空外の色・受想行識」は真の自分ではないからなのです。

【現代へのアプローチ】

この「無意識界」のプロセスが非常に困難であるために、悟りはなかなか遠いのです。ましてや「実体が無い空」を抱えたままでは、悟りには永

遠に到達することはないのです。

しかし般若心経が解読された現代はこれまでとは違います。現代は多くの人がこの困難なプロセスを成就して 真の悟りを得て 真の人類の恒久平和を創り上げなければならないという 正にその時なのです。

その時に至ったからこそ こうして般若心経は現代に蘇ったのです。

真の自分の「空中の色・受想行識」主導の意識にまで至れば 人間は自然にフラクタル共鳴へと導かれます。そこには全く新しい価値観が生まれてきて 人間はやっと苦しみから解放されます。

そうすれば 自らの生きる道も自然に見えてきて 人類の進むべき方向も見えてきて この真の自分の「空中の色・受想行識」主導の新しい価値観から 新しい行動原理が生まれてきます。

般若波羅密多の「瞑想」と「行」から生まれるこの新しい行動原理は人類をさらなるフラクタル共鳴へと導くことになります。

人類は〔基本三特質〕を軸とする行動原理を生み出すことで 恒久平和を手に入れることが出来るのです。

そして多くの人の般若波羅密多の祈りと瞑想により フラクタル共鳴が強まり、それによって独善的思想や虚無思想が淘汰され 独善の支配は終了し 虚無は消え去ります。

全ての民族が多層的に多層的に和合し 誰もが自他一体感に包まれ 個性豊かに 安心の気持ちを持続していながら 決して固定的では無く 進歩と調和の中に流動的に展開して生きることが出来るようになっていくのです。この新しい行動原理によって世界の秩序は次第に形を作り始めます。

だからといって 無菌状態のような社会が出来るわけではありません。犯罪が皆無に成ることはありません。しかし そこに大きなフラクタル共鳴があれば そのような人間の負の側面も 反面教師としての それなりの働きをするのです。

般若波羅密多の「瞑想」と「行」は フラクタル共鳴により 天上と地上が同期するように作用し 地上には恒久平和が築かれていくのです。

ですから 地上の修行者は「無意識界」に徹して 「心無罣礙」を保ちつつ さらに「行」を深めて空へと至り 空の立場に立ち そこから地上へと働きかけることになります。

この部分が 玄奘三蔵の示した色即是空 空即是色の境地です。

ここで言う玄奘の境地とは瞑想により一時的に空に戻るのではなく 般若波羅密多の「行」を深めて 生涯をかけて空に至り 空から現実世界に働きかけることを示しています。空は超実体であり 人間は本来 空の住人なのだから それができるのです。

だからこそ人は悟れるのであり もしも空が実体が無いのであれば 悟りそのものが実体が無いことになり 悟りの意味そのものを失います。

これはチョット考えれば 誰にでもわかることです。

ここで フラクタル共鳴を意味する般若波羅密多とは これは永遠性と絶対性と普遍性を基本とする価値体系に共鳴し 宇宙のフラクタル構造を縦に貫く変換自在なベクトルであると 意味を補強しておきましょう。

言い換えれば 人間は般若波羅密多の「瞑想」と「行」によって「空中」と「空外」をフラクタル共鳴に導き 次元を超えて 宇宙の中を縦横に展開して生きる存在なのです。

【第八節】 般若波羅密多の効能

故知般若波羅蜜多

是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切苦

故に ここに示した般若波羅密多の真言は 大きな靈力のある呪文であると知りなさい。
偉大な明知の呪文であると知りなさい。
この上ない呪文であると知りなさい。
比類の無い 呪文であると知りなさい。
この真言を唱え 行すれば 一切の苦が効果的に取り除かれます。

【呪文は暗号である】

編纂の段階で 般若波羅密多の真言を 緻密な論理で 極限にまで高密度に記述したものが「呪文」なのです。

「呪文」とはまさに時代を越えて保たれる論理性に満ちた暗号であり 靈力のある暗号であり 智慧に満ちた暗号であり 仏教を再生させる力のある暗号であると言えます。

そしてこの呪文には 一切の苦を取り除く力が秘められています。それは即ち ここに示した般若波羅密多による瞑想と「行」により 「心無罣礙」となることで 人間の精神の自由性を阻害している障害が取り除かれ その結果として 運命の困難から来る苦厄も取り除かれます。

それ故に 般若心経は現代へのメッセージと言えるのです。

一方 この暗号は長い間解読は出来なかったとしても この語句の配列と論理の中に般若波羅密多の真実が極限にまで圧縮されていて 整然と表現されていて 輝いて存在し続けているのは明らかです。

それ故に 般若心経は常にフラクタル共鳴の強いベクトルを発し続けていたのです。その証拠が般若心経の持つ靈力です。そこで「真実不虛故」に

続きます。

【特別の効能】

だからこそ表面的には意味不明であっても 般若波羅密多の真言は特別の霊力と知恵と比類の無い 特別の効果を持っているのです。

言い換えれば 般若心経は宇宙のフラクタル構造を記述し フラクタル共鳴を説いたものですから 読む人がその意味を理解できなくても 文字列や音声そのものが宇宙のフラクタル構造に合致し そこにフラクタル共鳴を生じさせる力が有るのです。

そうであると知りさえすれば この特別の効果は納得できるものであり 誰もそこに疑いは持たない筈です。

このような際立った効果こそが 宇宙のフラクタル構造にフラクタル共鳴する真実を示しており 般若波羅密多はフラクタル共鳴そのものである証でもあるのです。

そしてここで 振り返ってみれば あなたが今 この書に触れたことが般若波羅密多の証ではないでしょうか。

如何に意味不明であっても 人々は体験的にその効果を知り その霊力は人々を魅了し 般若心経が特別の経典であると信じて大切に扱い 歴史の中を生き延びてきた奇跡の最大の理由なのではないでしょうか。

さて 般若心経が未だ解読されていない段階として さらに説明を続けます。

そこで・・・

【第九節】 現代へのメッセージ

真実不虚故 説般若波羅蜜多呪 即説呪曰
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶
般若心經

ここに示した般若波羅蜜多の真言は 暫くは解読
できない時代が続きますが ここには真実そのも
のが厳然と表現されているのです。

これは決して虚偽ではないのですから この真言
の結論を以下に要約し そこにもフラクタル共鳴
を発生するようにしておきます。

それを以下に「般若波羅蜜多呪」として 示して
おきます。

そこでここに その要約の「真言」を説きます。

この 要約の真言の部分に関して 玄奘三蔵は漢語に翻訳せずに 敢えてサ
ンスクリット語をそのまま漢語で音訳しています。それには暗号としての
意味が 未だ明らかになっていない段階での 工夫が為されているのだと思わ
れます。

そこで著者はこれを 暗号が解読された現時点で十分な意味を持つように
現代語に意識し 特に現代において強いフラクタル共鳴を発する「真言」と
して ここに記述しておくことにします。それは即ち・・・。

展開せよ 展開せよ **空**の中から展開せよ。
空の中から 《宇宙の理念》を展開せよ。
悟りを得た者達よ。

最終的に般若波羅蜜多の結論を 単純な呪文としてここに示しました。

この呪文の意味も 般若波羅蜜多が解読できない限り 不明のままの時代が
続きますが この呪文として示した文言を含め 他の6個の般若波羅蜜多の語

句も この経典の中ではフラクタル共鳴の関係にあり その経典の中でエネルギーを発し続けています。何とも念の入った記述かと驚かされます。

最後に いずれ未来において般若心経が解読された時のために 実践すべき行動を呪文の中に強く指示して 般若心経はここに終了することになります。

前節までの修行によって 生涯をかけて色即是空を極め 「無意識界」の修行を成就し 悟りを得て空にいたり 今度は空即是色の立場から 現実世界に働きかけることを強く指示して 般若心経の結論としているのです。

これがまさに「絶対性と普遍性を確立して 人類の恒久平和を実現せよ！」との現代へのメッセージなのです。

【大本から読める 歓喜の様子】

「大本・般若心経」の最後の場面は以下の通りです。

この瞑想の場に列席していた一同は 観音様が説いた壮大な宇宙観と永遠の命を持つ生命観に触れたことで 心から感動し これを歓喜をもって受け入れたのです。

般若波羅密多そのもので在られる仏陀は これはご自身の悟りによる見解と完全に合致すると語られ これを承認したのです。

これは確かに架空の設定ではあるのですが 瞑想の場に列席していた 全ての人の感涙と わき上がる歓喜に満ちたこの場の雰囲気は 時を越えて 現代にまでそのまま伝わってくるようでさえあります。

そして我々現代人も 今ここに二千年の時を越えて解読された般若心経に触れさえすれば 心底感動しないでは居られない すばらしい真理の展開と内容です。

つまり この舞台設定は現代の今の状況の比喻であり 決して架空では無いことが分かります。

般若心経の真実を知った我々は まさに歓喜の状況にあり これは現実のものであります。これはまさに現代の私たちのことであり 心からの感謝にたえません。

これこそが 仏陀入滅後に混乱した仏教の再生を願い 新たに興した大乘仏教の真髓を纏めた 般若心経なのです。

ここに仏陀の真意が明らかになったことで 末法の世は終焉するのです。

以上

【付節】 再定義の証明

以下に、般若心経における、色・受想行識・諸法が、般若心経編纂時に、新たに再定義された語句である事を証明する。

ここでは、これらの語句の意味には関係なく、語句の配置と配列からのみ、論理的に「再定義」を証明できることに注目すること。

さらに、語句の意味には関係ないことから、「実体が無い空」であろうと、「超実体の空」であろうと、再定義は成立していることも重要です。

色不異空から 色は空である。
空不異色から 空は色である。

[色 → 空]
[空 → 色]

色であるためには空であることが必要十分条件である。

従って、色は空と恒等的に等しい。

[色 ≡ 空]

・・・①。本文の結論。

是諸法空相から 諸法は空相である。
諸法であるためには空相であることが必要条件である。

[諸法 → 空相]

・・・②。本文の結論。

一方 是故空中 無色・・・から
色は空中に含まれない。

[色 ∉ 空中]

・・・・・・③・・・・本文の結論。

ここで空中とは 空と空相から成る。

[空中 = 空 ∪ 空相]

・・・④本文の帰結。

① ② ③ ④より
色は空中に含まれる。と同時に
色は空中に含まれない。が成立する。

[色 ∈ 空中] AND [色 ∉ 空中]

従って解は 色は色と恒等的に異なる。となる。

[色 ≠ 色]

従って ここで色は「初期仏教の語句」であるから
色は「再定義された語句」でなければならない。

受想行識 亦復如是。
即ち 色は受想行識と同じである。
従って ここで受想行識は「初期仏教の語句」であるから
受想行識は「再定義された語句」でなければならない。

次に 諸法については
同様に 空中は空と空相からなる。

・・・④から
諸法は空中に含まれる。

諸法 \in 空中

一方 是故空中・・・無・・・法 であるから
法は空中に含まれない。

法 \notin 空中

・・・⑤・・・本文の結論。

②と⑤から
諸法は空中に含まれると同時に
法は空中に含まれないが成立する。

[諸法 \in 空中] AND 法 \notin 空中]

従って解は 法と諸法は恒等的に異なるとなる。

諸法 \neq 法

従って ここで法は「初期仏教の語句」であるから
諸法は「再定義された語句」でなければならない。

以上で 色・受想行識・諸法は再定義された語句であることを証明した。

証明終わり

結び

【色・受想行識に関する二つのモデル】

本書では 長く永遠不滅の存在として語られてきた「霊体」と「魂魄」の関係に 色と受想行識を対応させて解釈しました。本文の中では敢えて「魂魄」の語句は遣いませんでした。

【フラクタル変換装置としての魂魄】

ところで「魂魄」とは 宇宙時代の現代にふさわしい比喩で言うならば これは基地と交信のための通信装置や生命維持装置を備えた宇宙服です。

次元を越えて空の世界から空中の外側の「現象」と「事象」の世界に降りてくるには 霊体自身と その霊体を保護するための表面層と さらに次元を変換してこの世界にマッチングさせるための宇宙服が必要です。つまり ここで宇宙服とはフラクタル変換装置なのです。

用途の異なる二着の宇宙服は 「天上用」と「地上用」の二着です。天上用の宇宙服は「魂」ですが 地上用の宇宙服としては「魂と魄」の両方です。

死後「魄」は地上と天上の境界域に残し 諸法の管理のもとに置きます。生まれ変わりを含めて 天上界にしながら 再び地上に係わる必要があるときには いつでも使える状況にしております。

「魂魄」の「魂」の部位は空の特質を持ったまま 天上界の宇宙服として「霊体」の表面層として生き続けます。

このように色とは空から分かれた存在 即ち「霊体」であって 諸法の世界に守られていて さらに 受想行識は「生命活動の場」にマッチングするために 宇宙服として存在しているのです。

さらに この延長の流れで説明すれば 「色と受想行識」は三着目の宇宙服であるということになります。しかし 肉体とその精神作用は 「宇宙服」というよりは「宇宙船」にたとえるのが良いと思います。人は死によって 宇宙船を廃棄して宇宙服のまま 天上に帰ります。

フラクタル変換装置によりフラクタル共鳴を発生させて次元を繋ぎ 宇宙のフラクタル構造の中に フラクタル共鳴を求めて それを創りながら生きるのが人間なのです。そしてそれが生命活動なのです。

心霊学的に言われているように 自己の本質は「霊体」とその精神作用であり 永遠の命であることをも示しています。

従ってこれに関して 著者は 多くの宗教において共通理解を得やすい内容であると思っています。

【新旧二つのモデル】

本書のこのモデルでは守護の神霊に関する説明が十分に出来ず 般若波羅密多を体験している著者としてはかなり表現不足に感じていますが 実はこのモデルでは 観音様が守護の

神霊の代表として説かれていると解釈出来ます。そうであれば このモデルにとっては 玄奘三蔵が追記して示した度一切苦厄により 衆生救済の働きとしての観音様の存在が急に重要になってくるのです。そしてもちろん 守護の神霊も観音様も本質は人間と同じであり **色と受想行識**として扱うことが出来るのです。

紙面の関係で観音様の働きについては触れることが出来ませんでしたがこの点は他書に譲りたいと思います。

ここで示した「モデル」とは決して固定的に捉えるのではなく 多くの体験と研究で 改良されていく性質を持つものです。著者としては 宇宙の詳細を説明するには更なる改良モデルが必要であると考えています。

【論理性の中から情緒性を読み解け】

般若心経は論理的な表現に徹していますが その背後には満ちあふれる情緒性が秘められています。私は般若心経の中に正しく情緒性を読み解き ここに秘められた「深い愛」と「片寄らない平和」を正しく受け取りました。

しかし このような論理に徹した表現は誤解されがちであるし かなり勇気がいる表現です。

ここでは普遍的表現に徹していて しかも いわゆる宗教的な内容 即ち愛とか慈悲とか 為すべき善行為とか 戒律とか 様々な禁止行為とか そのようなことは普遍性を確保するために 一切記述していません。それを読み解くことは読者に委ねられているのです。

般若心経は情緒的表現を押さえ 宗教を成立させる基盤となる 宇宙の構造を緻密な論理で説いているのであり それ故に現代に於ける般若心経の存在意義は巨大なのです。

つまり 全ての宗教をこの基盤となる宇宙の構造の中に吸収できるということなのです。

【世界の恒久平和は近い】

さて 人類の歴史は 沢山の地域で文化を育て 歴史を積み重ねてきましたが いまや狭くなった地球上で 必然的に複数の文化が 深く関わり合うことになってきました。

その結果 現代社会は 幾つもの宗教や民族が自らの絶対性のみを主張し 他を排除することで独善となり 神や正義の名の下に決して解決することのない 対立の構図を作っているのです。

そこで 今ここに 般若心経によって絶対性と普遍性を矛盾無く両立させる**空**が説かれたことは 人類の恒久平和実現にとって 極めて重要な意味を持つこととなります。

さらに言及すれば 宇宙スケールで**諸法**を説いている般若心経は 他の**法**から訪れる宇宙人に対してであっても 十分に通用する真理であることは特筆すべきことです。

【般若心経に込められたメッセージ】

そこで 以下のような最重要メッセージとなります。

これからの時代は 人類ひとりひとりが**色と受想行識**に至り 各自が絶対性を保持したまま 独善を排除し 普遍性を追求する修行によってフラクタル共鳴に達しなければなりません

ん。

絶対性と普遍性を追求することは「人類愛」を実践することに外なりません。絶対性と普遍性を無視すれば それは独善と成り 対立を生むだけです。

やがて 絶対性と普遍性を両立させる 般若波羅密多の意味が浸透してくれば 人類が《宇宙の理念》の下に 絶対性と普遍性を追求することを理想とすることに共通理解が生まれてきます。ここで 《宇宙の理念》とは「空の理念」そのものです。

そして実質的に指導的立場の人間が 即ち指導者が修行によって空に帰還し 空即是色に移行することが出来るようになります。

ここに フラクタル共鳴の中で 多くの指導者が生まれ育ち 般若波羅密多を学び 人類は次第に《宇宙の理念》に共鳴し 絶対普遍の価値体系の下に統一され いよいよ《宇宙の理念》が地上に投影されてきます。

多くの人々がフラクタル共鳴に至れば 宇宙のフラクタル構造を通して交流し 共鳴し合います。無意識の行動や直感がフラクタル共鳴の中で 共通の理念の下に作用し合います。そこにはフラクタル共鳴による 守護の神霊に導かれた真の共時性が現れて 人々をつなぎます。

政治経済を含む 人間の営みの一切がフラクタル共鳴の中に統合されていくことで世界の恒久平和が実現されることとなります。ただし 物質や形式でフラクタル共鳴を求めようとすると普遍性が得られません。形式は仮の物です。どこまでも精神性のフラクタル共鳴を求めべきなのです。

般若波羅密多の原理 即ちフラクタル共鳴の原理がここに示されたことは 世界の恒久平和に近いことを意味しています。般若心経はそれほどの宇宙スケールを持った理論と実践論なのです。

【今こそ 個と全体を調和させる行動原理が必要になる】

このような時である今だからこそ 未来を作るために必要な「個と全体を調和させる行動原理」が生まれてくることが期待されます。これはこの現実世界に生きていて 肉のみを持つ我々の使命なのです。そして般若心経はそのような より実践的な行動原理を生み出すための基本原理となります。

このために多くの三世諸仏は守護者として諸法の背後にあって 諸法をコントロールして強く現実世界に係わることとなります。

諸法は 絶対普遍の価値体系の下に 表現の多様性を基本として 普遍性の原理の中に色と受想行識を支えます。

そしてさらに守護の神霊はこの時とばかりに 諸法の制御と管理機能に深く関わります。個々の色と受想行識の絶対性を守り 多様性の中に普遍性を確保するために 独善を排除し しかし 個性と個性の間 文化と文化の間では交流をしつつも 適切な距離と壁を置くことでそれぞれの個性を育てつつ 個性を守り その使命を補佐します。

従って秩序は決して形の平等ではなく 多層化された秩序の中で 常に個々の使命の達成に必要な立ち位置に導き その運命を護ることで 人類の生命活動を支え続けるのです。

これが 人類の求め続けた最終的な世界の恒久平和の姿です。

おわり

引用文献

文献一 般若心経とは何か 仏陀から大乘へ
宮元啓一 春秋社
二〇〇五年二月二十日 第四版

般若心経の解説は進化し続けます。

進化に応じて 本文はしばしば更新されます。